

## 「ローマ教会への挨拶」

2018年08月20日

ローマの信徒への手紙1章1節、7節 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、—— 神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

ローマ書はパウロが書いた手紙である。パウロはキリスト教界最大、最高の伝道者であるということに異議を挟む人はいない。福音宣教はもちろん、主イエスの凄まじいほどの愛の生涯に触れ、悲惨な十字架刑を目撃し、十字架の死から神により復活させられた主イエスの勝利の力を知り、聖霊降臨による信仰の覚醒などを体験した弟子たちの宣教によって広められ、定着していった。それは、ユダヤ教の枠内の分派活動の域を出なかった。一方、パウロは、主イエスにおいて現わされた福音の出来事をローマ帝国内に宣教し、福音が異邦人にも及ぶ真理であることを明らかにした。パウロは、現在のトルコ、ギリシアを疾風のように駆け巡り、福音を宣べ伝え、キリスト信者を起こし、教会を立てた。もし、パウロがいなかったならば、キリスト教は今日のような形にならなかったのではないかと思われる。それほど、パウロの教会に与えた影響は絶大である。

パウロはユダヤ教の厳格なファリサイ派に属し、将来を嘱望されていた優秀な学徒であった。神殿を冒とくし、律法に従わないキリスト信者を弾劾、迫害していた最中、復活したキリストに出会い、180度回心し、キリストの福音を宣教する者になった。回心の喜びは大きく、宣教は狂気のような激しさである。宣教期間は、十数年であろうが、その間、幾通かの手紙を書き残した。パウロの名を冠した手紙は多くあるが、パウロ自身が書いた手紙は、ローマ書、Iコリント書、IIコリント書、ガラテヤ書、フィリピ書、Iテサロニケ書、フィレモン書の7通とされている。パウロは宣教する間、諸教会から質問を寄せられ、その答えを求められた。また、宣教した教会で様々な問題が起こり、それに対し、福音的な解決の道を示さなければならなかった。書かなければならない具体的な理由があって、これらの手紙を書いたのである。その中で、ローマ書は、具体的な事柄に関する記述は少なく、キリスト教信仰を体系的に整え、神学的な論述を展開している。後の教会は、ローマ書を基礎にして、キリスト教信仰の教義を組み立てている。ローマ書は、紀元57年頃、パウロが最後に書いた手紙である。この時代、時の都・ローマにも、キリスト信者たちは既に教会を立て、信仰と交わりを深め、宣教に励んでいた。パウロはローマ教会を訪ねたことはなく、何としてもローマ教会を訪ね、信仰を励ましたい。そしてローマ教会から派遣され、地の果てイスパニア宣教を目指したいと願っていた。パウロはローマ行きを望み、愛と信頼を込めて、キリスト教信仰がどんなものであるかを論述し、大部のローマ書を認めたのである。ローマ書の冒頭は、例によって、書き手である自分は福音のために選び分かつた使徒パウロで、宛先は、神に召されて聖なる者とされたローマ教会である、そして、神と主イエスからの恵みと平和を祈る祝福の挨拶の3点から書き出している。

パウロの手紙が新約聖書の中では最初に書かれているが、埋もれ失われることなく、よくぞ、教会の中で伝承されてきたものだ。パウロの手紙に福音の喜びが満ちていたからであろうが、初代教会の福音を伝えたいという熱意が、今日の私たちのところまで伝えられてきた訳で、彼らの福音にかけた信仰と神の導きを覚え、ただ感謝である。